

国民国家の形成とパクスブリタニカ

☆国民国家とは何か??

→近代的憲法と国民軍を持つ国家。個人が“自由”である事が特徴

cf 中世→農奴制、ギルド、ツンフト、騎士

近代→平等(?)な個人

背景には 19 世紀の二つの革命→保守反動政治の終焉

19 世紀にヨーロッパ諸国では近代化が大きく進展

☆近代化とは何か??

→国民国家の形成と産業革命の達成=工業化の進展

個人が自由な社会に適合する社会形体=個人が十分な経済活動に励む事ができる社会

国民国家にフィットする経済体制はまさに工業化社会であった。

☆これらの諸条件を他の西欧諸国より群を抜いて

早く達成したのがイギリス

産業革命は 1760 年代に達成

清教徒革命、名誉革命でいち早く立憲君主制と

独特の議会制度を確立（二大政党制）

他の西欧諸国はイギリスの外圧の中で競って近代化を

遂げていく事になる

☆パクスブリタニカとは何か??

ウィーン体制の崩壊期から 1870 年代中盤までを指して主に使われる。ヴィクトリア女王治政。

・国内の自由主義的改革

（選挙権拡大、労働者層への権利拡大、法の下での平等達成=審査法廃止、奴隷制度廃止、国内産業の育成と海外輸出の促進、自由貿易政策の推進=穀物法、航海法の廃止）や、

・対外的優位

（圧倒的経済力、広範囲に及ぶ大英帝国領、アジアへの進出、クリミア戦争、インド大反乱、アロー戦争などの勝利）

・後世の歴史家によって 17 世紀のオランダ、20 世紀中盤のアメリカと並んで覇権国家と称えられる、まさにイギリスが世界最強の国家だった時代。

Cf パックス=タターリカ

パックス=イスラミカ

パックス=ロマーナ

パックス=アメリカーナ

パクス=ブリタニカ時代の国内情勢

自由党（グラッドストーン）と保守党（ディズレーリ）の二大政党

議論の焦点→アイルランド独立問題、国家拡大、労働者問題

外交…光荣ある孤立（力があるからこそなせる技）

終焉…ドイツの台頭、第二次産業革命の進展など。

ウィーン体制の崩壊とヨーロッパ諸国

1853~1856

クリミア戦争の勃発 露の南下政策

セヴァストーポリの激戦

☆ ウィーン体制崩壊後初の列強同士の大規模戦争
列強同士の血で血を洗う抗争の時代が到来!!

①ロシア

ニコライ2世没後アレクサンドル2世即位

ロシアの後進性を痛感し近代化につとめる。

- ・ 領土拡大
→清との条約=愛琿条約、北京条約
→クリミア戦争、ロシア=トルコ戦争
→中央アジア=ウズベク3ハン国の併合
- ・ 農奴解放令(1861)…農奴の人格的解放
→しかし実際は…??ミールに土地払い下げ
- ・ 貴族、地主の意思に逆らえず後半反動化
- ・ ナロードニキ運動

都市の知識人階級(インテリゲンツィア)が推進

ヴ=ナロード 農民の啓蒙活動

→失敗、一部の狂信的運動家がテロリズムへ

→皇帝暗殺(1881)

☆ ロシアはロシア革命が起こるまでツァーリズムの国であり、近代国家へ脱皮する事ができなかった。

②フランス

七月王政の崩壊(1848)→第二共和制

臨時政府…社会主義者が入閣(ルイ=ブラン)首班ティエール

六月暴動…カヴェニャックの鎮圧

総選挙=ルイ=ナポレオンの圧勝 vs カヴェニャック

1851 ルイ=ナポレオンのクーデタ

1852 国民投票で皇帝就任(ナポレオン三世) →第二帝政開始

ボナパルティズム

『歴史的な大事件や重要人物はすべて、いうならば二度繰り返される』
とヘーゲルはどこかで指摘したが、彼は以下のことを付け加えるのを忘れている。一度目は悲劇だが、二度目は茶番劇だということ。
というマルクスの言葉がある。しかし、ナポレオン三世の治世はマルクスの言葉とは裏腹に巧妙かつ優れたものだった。

資本家階級と労働者階級の均衡を利用しながら、宗教的政策も行いあらゆる基盤の支持層を得て、形式的に民主主義的制度を残しながら実質皇帝独裁を行うもの。

Cf エルサレム管理権問題…聖教徒とカトリック